日本に古代はあったのか

井上章一
国際日本文化研究センター

しばらくおつき合いください。歴史の話をします。法隆寺というお寺があることは、皆さんご存じだと思います。７世紀の終わりか８世紀の初めに、再建されました。以前、私はその法隆寺についての本を書きました。これをあるイギリス人の建築家に紹介したんですよ、日本の古代建築である法隆寺を論じた本だ、と。すると、そのイギリス人建築家は、僕に疑問を突きつけました。「７世紀の終わりから８世紀の初め、それは中世じゃないの。なぜそんなのが古代なの」と言われました。言われてみればそのとおりで、ヨーロッパでは７世紀の終わり、８世紀の初めの修道院は、中世の建築です。中世の修道院です。なぜ日本の法隆寺は古代になってしまうのでしょうか。その疑問から、私は、日本の古代史というのは一体どのようにしてつくられたのだろうということに興味を持つようになりました。

そもそも古代とは何なのでしょうか。僕らは、学校で、中学校や高等学校でヨーロッパの中世は５世紀に始まると教わります。ですが、日本の中世は12世紀の終わり、鎌倉時代に始まると教わります。何と700年ぐらい違っています。ほんとうにヨーロッパと日本は700年もずれていたのだろうかということを考えさせられました。

ヨーロッパの古代史とは何でしょうか。ちょっと歴史の復習をしてみてください。地中海にアテネやスパルタをはじめとする都市国家ができます。やがてそれらは、ローマ帝国によって１つの地中海帝国にまとめられます。ですが、４世紀、５世紀には、北のほうからゲルマン民族が入ってきて、古代のローマ帝国の西側は壊され、ゲルマン人たちの小さい国々ができていく。これをヨーロッパの中世史として普通皆さんは位置づけていると思います。

実は、これとほぼ同じ歴史が東アジアの中国にもあります。紀元前６世紀から７世紀の春秋時代と言われる時代に小さい都市国家が幾つもできました。丘があるんですよ。丘の上に神殿が建って、その周りで市民が暮らしを営み、その周りをさらに城壁が囲む、そういう小さい都市国家が幾つもできました。そして、その春秋時代に、孔子や孟子をはじめとする、今日にまでつづく東アジアのクラシックの著者たち。ヨーロッパでいえばソクラテスとかプラトンに当たる人たちが出たわけです。ですが、紀元前３世紀になると、その中国の都市国家群は、秦帝国や漢帝国という強大な帝国によって支配されるようになります。都市国家から強大な帝国という歴史を中国と地中海はともに持っています。

地中海と同じように、中国にも、北の方から異民族が入ります。匈奴とか鮮卑と呼ばれる遊牧民たちです。そして、匈奴や鮮卑たちは、漢帝国崩壊後の中国に、彼ら自身の小さい国々を幾つもつくっていくのです。三国時代のあとにくる時代、４世紀からの五胡十六国時代と言われる時代がそうです。おわかりでしょうか。都市国家から強大な帝国、そして、北のほうから異民族が入ってきて小さい国々に分かれる。中国と地中海は、その点でほとんど並行した歴史をたどっています。この並

行性から、京都大学の東洋史学は、漢帝国までを中国の古代、漢帝国が崩壊してから後、つまり３世紀以後を中国の中世として位置づけてきました。

特に際立つのは宮崎市定先生の世界史です。漢帝国に入ってきた北方の異民族、匈奴と鮮卑ですが、匈奴と鮮卑は、お互いに勢力争いをします。そして、匈奴は負けます。その負けた匈奴は、次第に西のほうに移ります。そして、５世紀には、スラブ地方にたどり着きました。それがフン族です。そのフン族に押されて、ゲルマン人たちは西ローマにたどり着きます。宮崎市定先生はこの現象から、ユーラシア全体の中世をアジアの遊牧民たちがつくったのだと、みなされました。中国の古代帝国もその崩壊後はアジアの遊牧民に蹂躙され、地中海の古代帝国もアジアから来た遊牧民に、遊牧民ではないですね、遊牧民が追い出したゲルマン人に壊される。ここの歴史を、匈奴、フン族というユーラシアの遊牧民がユーラシア全体に新しい中世をもたらしたのだと宮崎市定先生は考えられとのです。僕は、大変この話をおもしろく思い、共感を持っています。

ところで、中国は３世紀から中世になるというこの見方は、京都大学では認められていますが、東京大学では受け付けていません。東京大学は、伝統的に10世紀からを中国の中世と考えます。唐という国が壊れ、宋に移る、この唐から宋への移行を、10世紀の移行を古代から中世への移行と考えます。これは、おもしろい現象で、例えば「中国古代政治史研究、隋唐の官僚制をめぐって」というような論文があれば、タイトルを見ただけで、東京大学の関係者が書いた論文だということがわかります。「中国中世政治の研究、隋唐貴族制の展開をめぐって」と書いた論文があれば、間違いなく京都大学関係者の書いた論文です。

困るのは、他大学の出身者です。京大と東大を出た人は、お互いの学閥に従って仕事をすればいいのですが、ほかの大学を出た人は、結構困るんですよ。将来どっちの学閥に就職するかわかりませんから、なるべく時代区分については言わないようにしようという処世術を彼らは身につけています。日本の学界とみなさんに、どういったおつき合いあるか私にはよくわかりませんが、学閥対立というのは、大変おもしろい現象です。

僕は京都大学を卒業しました。それで、京都大学の立場に立って中国史を考えます。３世紀に中国は古代史を終えた。そして、３世紀から中世に入る、そう考えます。それはなぜかというと、北方の異民族が、帝国崩壊後に、彼らの国をたてていくという同じ歴史があるからです。

３世紀に中国では魏、呉、蜀という三国が対立し合う時代になります。帝国がこわれ、分裂的な中世がはじまるわけです。その魏という国と、日本の邪馬台国は国交を結んでいました。邪馬台国の卑弥呼は、魏に使いを送っていました。そうすると、邪馬台国、３世紀の邪馬台国は東アジアの中世史に入れてもいいのではないでしょうか。鎌倉幕府から中世が始まると私たちは習います。12世紀から。ですが、３世紀の邪馬台国から中世を始めて何が悪いんだろう、むしろ、東アジアの歴史を考えれば、そのほうがいいのではないかと私は思うようになっています。

話を変えます。宗教の話をさせてください。ギリシャにオルフェウスの伝説があるのは皆さんもご存じだと思います。オルフェウスの妻が亡くなり、死者の国に行くわけですね。エウリュディケやったかな、これを、オルフェウスが迎えに行きます。すると、死者の国の王であるハデスは、彼女が現世へもどるのをゆるすんですよ。死者の国の洞窟から地上に帰らせるんです。その途中でオルフェウスが振り返

ると、彼女は帰れないという約束をさせて、洞窟を帰らせるんですね。だけど、後ろから妻がついてくる足音が聞こえないので、思わず振り返ると、後ろにいた妻は、「ああ、あなたは結局振り返ってしまったのね」ということで、この世には戻れない話です。これとほとんど同じ話が日本の神話にあります。イザナギの話です。全く同じつくりになっていますが、これが似ていることを言いたいのではありません。私が強調したいのは、地中海の神話でも日本の古い神話でも、亡くなった人は天国や地獄に行かないという点です。極楽とか地獄というように、善悪であの世が分けられるのではありません。十把一からげの死者の国へ行っているということに注目してほしいのです。いいことをしたら天国に行き、悪いことをしたら地獄に行くのではありません。ともに死者の国に行っているわけです、キリスト教や仏教以前の神話では。

これに対し、仏教は、天国と地獄を分けます。あの世を善悪の２つに分けます。キリスト教も善悪の２つに来世を、来世と言うのは変やね、次の世を分けます。比べれば、仏教とキリスト教はよく似たところを持っているのではないでしょうか。そういえば、神は最後の審判で復活します。仏教でも弥勒菩薩は56億7,000万年後によみがえることになっています。モーゼには十戒という戒律があります。ブッダにはその半分の五戒という戒律があります。イエスには12人の弟子がいました。ブッダには10人の弟子がいます。イエスはユダに裏切られました。ブッダはダイバダッダに裏切られます。仏教の数珠とカソリックのロザリオは何と似かよっていることでしょうか。カソリックの洗礼の儀式と仏教の灌頂の儀式もほとんどそっくりです。

私はこう考えます。この２つは結構似ているんだ。キリスト教はシナイ半島で生まれました。仏教はインドの東北部で生まれています。そして、シナイ半島からインドの東北部にはさまれた地域では、善悪の二元論を持った世界宗教が幾つも生まれたのです。マニ教がそうでした。ゾロアスター教がそうです。その世界宗教地帯の一番西の端から生まれたのがキリスト教で、一番東の端から生まれたのが仏教だったのではないでしょうか。

シナイ半島は、ローマ帝国領内に入りますから、１世紀のローマにはキリスト教があります。そして、この教えは、紀元６世紀にはヨーロッパ全域にたどり着きました。一方、仏教は、紀元１世紀に漢帝国にたどり着きます。そして、紀元６世紀には日本に届きました。ヨーロッパではキリスト教が普及していく推移を中世的な現象だと考えます。にもかかわらず、日本では仏教が届くことを古代仏教の伝来とみなします。ユーラシアの世界宗教は、ほとんど同じように東西対称に伝わっていったのに、なぜヨーロッパはそれを中世と呼び、日本はそれを古代と呼ぶのでしょうか。中世の仏教は、日本では法然や日蓮、親鸞、あるいは一遍、つまり鎌倉新仏教から始まるとされます。12世紀、13世紀から中世仏教が始まるとされます。一体なぜ私たちの歴史は、そんなに鎌倉時代を重視しなければならないのでしょうか。

ごめんなさい、さっき私は、邪馬台国から中世を始めてもいい、３世紀から中世を始めてもいいと言いました。しかし、今、仏教が伝来した６世紀からを中世にしてもいいという話をしています。一体どっちなんや、３世紀か６世紀かどっちなんやといぶかしく思われる方がいらっしゃるかもしれません。僕は、基本的に３世紀からの東アジア中世史でいいと思っています。ですが、卑弥呼はシャーマンでした。まだ、世界宗教は届いていません。そのことを考えれば、６世紀からの中世史

を想定してもいいかなと思っています。ただ、12世紀から中世をはじめる今の日本史にはなじめないということです。

しかし、日本の歴史家は、こういうことを全く考えません。このごろの学界は、平安時代の中ごろから中世を始めるようにもなりだしています。ですが、僕らの習う教科書は、鎌倉時代から、1192年、「いいくにつくろう鎌倉幕府」といって、中世をはじめます。最近は、源頼朝が守護・地頭を設置する1185年を例にとって「いいはこたてよう鎌倉幕府」と学校では教えているらしいです。

まず、鎌倉問題ですが、日本史って古代を平安時代に終わらせますよね。鎌倉時代から新しい武家の世の中が始まります。中世は安土桃山時代で終わり、近世は江戸で始まります。古代の腐り切った貴族とお坊さんの世の中を武士が打倒して、鎌倉に幕府をつくった、これが新しい中世。戦国の混乱した世の中を最終的にまとめ上げて、統一政権をつくったのは江戸の徳川幕府、これで江戸時代からが近世。この歴史、変だと思わないでしょうか。新しい中世と近世は常に関東地方で始まっています。この新しい世の中に乗り越えられる古い時代は常に近畿地方に中心をおいてます。まるで近畿は古くて停滞的でおくれているけれども、関東は進歩的で進んでいて新しいと言わんばかりの情操教育を私たちは受けてきたのではないでしょうか。私は、関西人の１人として、この歴史、東京がつくった、東京のイデオロギーでまとめた歴史に大変強い違和感を抱いています。きょう、私は、しゃべれへんせいもあるんですが、共通語ではなく京都弁のイントネーションでしゃべっています。何が悲しくて東京弁をしゃべらなあかんのやという気持ちも強く抱いています。私の中には、京都、関西イデオロギーがあります。それはご了解ください。

私の幼いころに教わった歴史にこんなのもありました。平家、平清盛が率いた平家は、京都にいたので、武士としては腐ってしまった。公家のようになって堕落してしまって、武士の世の中をつくることができなかった。だけど、源頼朝は、関東にいた。京都の毒牙に染まらなかったので、関東地方に健やかな武家の世の中を切り開くことができた。そういうふうに教わりました。何という歴史でしょうか。関東地方にいれば、人間は健康になる、京都にいれば、人間は腐る、何という情操教育でしょうか。私は、こういう教育を許してきた近代日本百数十年に強い憤りを抱いております。

急ぎますね。実を言うと、江戸時代の歴史家は、京都にいると人は腐るという歴史観を持っていませんでした。関東で人間が健やかに育つという歴史観を江戸時代の歴史家は持っていませんでした。武士が台頭していくこともそんなに美しくは描きませんでした。江戸時代の歴史家たちは、朝廷の権威を見くびるようなことをして申しわけありませんと、後ろめたそうに武士の台頭を描いていました。これを京都にいると人間が腐ると言い、関東にいると健やかだというふうに描くようになったのは、明治以降です。つまり、天皇を京都から東京へ運んだ後につくられた歴史観なのです、これは。そして、それを、中世だと言い切った最初の歴史家は、原勝朗という人です。今からちょうど101年前、1906年に原勝朗は『日本中世史』という本を書きました。そこでは、こう言っています。平安時代の終わりごろに関東地方でうごめいている武士たちを見ると、まるでローマのタキトゥスがゲルマニアの戦士を描いたように思える。そうだ、関東平野はゲルマニアなのだ、京都盆地がローマ帝国なのだと、そう考えたのです。そして、ローマ帝国である京都盆地をゲルマニアである関東平野が乗り越えたことに、ヨーロッパと同じ変化、古代から中世

への移り変わりを原勝朗は読み取ったのです。

ついでに言うと、原勝朗はこうも考えていました。京都には中国の影響が強くある。だから、それはほんとうの日本ではない。だけど、関東平野に中国の影響はあまり届かなかった。だから、関東平野においてこそ、ほんとうの日本の民族の歴史はあるのだと考えたのです。日本の民族の歴史は、ゲルマニアがたどったそれによく似ている。京都から関東へ中心が移ることこそが、日本の歴史が中国的な歴史からぬけだし、ヨーロッパ的な歴史をたどったことをしめているという、いわゆる脱亜論的な見通しを持ったわけです。

しかし、あの小さい関東平野がゲルマニアになるのでしょうか。あの京都盆地をローマ帝国に見立ててもかまわないのでしょうか。私は、東アジアの歴史を考えれば、ローマ帝国になぞらえるべきは黄河流域の中国中原であり、ゲルマニアに見立てられるべきはバイカル湖からゴビ砂漠を経て満州に至る大平原であろうかと思います。３世紀に中国は中世史を迎えたという世界史に全く見向きもせずに、ものすごくみみっちい、ちっぽけな京都盆地と関東平野の闘いで中世を語ったのが原勝朗なのです。僕は、こういう見方に関西人として違和感を抱くのみならず、東アジア人の１人としても違和感を抱いている次第です。ちょっとうそが入っているかな。

原勝朗先生は、後に京都大学に赴任なさいました。そして、京都大学で西洋史を教えはるのですが、子供が京都弁をしゃべるようになったのですね。子供が京都弁をしゃべるたびに、原先生は子供を殴っていたといいます。なんということでしょうか。今、私たちの教科書に流れている日本史、日本中世史は、京都弁を子供がしゃべるたびに殴っていたようなおっさんがつくった歴史なのです。私が抱いている違和感の勘どころも察していただけたかと思います。

ちょっと別の話になりますが、今終わるとちょうど時間回復できるねんね。もうちょっといい？

モスクワへ来たら、これが言いたかったんだという話を続いてさせてください。モスクワの歴史家の皆さんも長らくマルクス主義に、親しんでこられたと思いますが、日本の歴史家たちもマルクス主義に長らくつかってきました。日本にはじめてマルクス主義が伝わったのは1920代だと思います。そして、奈良時代や平安時代のことをマルクス主義風に考えるようになったのは、1930年代からだと思います。ですが、そのころのマルクス主義者たちは、例えば奈良時代のことを日本の古代だとは考えませんでした。なぜかというと、古代は奴隷制社会だけれども、大化の改新や律令制についての資料を見ても、奴隷がそんなにたくさんいたとは思えないからです。奴婢というのがいますが、せいぜい人口の１割もないだろう。これは奴隷制社会じゃあない。日本は原始的な部族、氏族社会がそのまま大化の改新を経て封建制国家に移ったのだと、初期のマルクス主義者たちは考えました。つまり、日本に古代はない、日本史は中世から始まると考えていたのです。

ところが、1930年代の中ごろから、渡辺義通とか、後には石母田正とか松本新八郎とか、そういうような人たちが、いや日本には奴隷制があったというふうに考えるようになります。特に渡辺義通ですね。ですが、その論拠は、はっきりしない。どんな史料を見てもそんなに奴隷が多いとは思えないですからね。でも、渡辺は多くの班田農民たちが建設工事に動員されていたことを、奴隷制のしるしにしました。道路をつくらされる、建物をつくらされる、もっと前ですと大きい古墳をつくらされる。こんなのは奴隷の仕事だということで、日本にも古代奴隷制があったと

1935年ごろからのマルクス主義者たちは考えたのです。この見立てに先ほど申し上げた関東が中世を切り開くという見方もくっついて、戦後の歴史学ができ上がります。

私は、この奴隷制やとか封建制という議論がほんとうのところよくわからないんです。歴史の史料を見て、ある耕作者がいるとしましょう、この耕作者が奴隷なのか農奴なのかというのは、はっきりわけられないことが多いと思います。こんな議論で歴史を論じるのは、ほんとうは困ったことではないかなと思うのですが、ただ、中世とか古代という言い方には、マルクス主義者たちが決めてきた部分もありますから、この議論にもつき合わなければならないと思いました。それで、昔の論文をいろいろ調べたのです。そして、1930年代の初めごろのマルクス主義者たちが、日本に古代はない、大化の改新以降が中世的な封建国家だと位置づけていることを知りました。日本には古代奴隷制があった、中世は鎌倉時代からだという見方がマルクス主義者の間にも広がったのは1930年代の後半からであることも知りました。

ここで私が注目したいのは、昔のソビエトの歴史学です。ニコライ・コンラッドという方を皆さんは当然ご存じだと思います。ニコライ・コンラッドももちろんマルクス主義に従って歴史を書くのですが、大化の改新や律令制の史料を見て、日本にそれほど奴隷が多かったとは思えないので、その時代を中世的な封建国家だと位置づけています。ニコライ・コンラッドの本は、1930年代の日本でも翻訳されています。私は、ロシア語が読めませんが、その翻訳されたコンラッドの本でそういうことがわかりました。後に、1960年代に入って、コンスタンチン・ポポフという、やはりロシアの日本学者が、日本の奈良時代を中世封建社会として位置づけていることを知りました。つまり、ソビエト時代の歴史家は、中世史を６、７世紀から始めて構わないという考えを、私と同じ歴史観を持っていてくれていることを知ったわけです。それで、私は、こんなことを皆さんがどう思われるかわかりませんが、いや、ソビエトもなかなか大したものだなと思うようになりました。

ところがです。次からは、ちょっと私、ロシア語が読めないので、読める人に教えてもらったのですが、1988年に出たクズネツォフの『日本史』という本があるらしいですが、このクズネツォフさん、これは大学の教科書にもなっている本らしいのですが、封建日本を７世紀から始めています。律令時代、奈良時代は中世に組み入れています。トルストグーゾフという人の『７世紀―14世紀の日本歴史概論、封建制の形成』という本も同じです。これは1995年の本です。ところが、1998年に出た、ごく最近ですが、ズーコフという人の『日本史』を読むと、この本では日本中世史を鎌倉時代から始めています。つまり、ソビエト時代には、私の持っている歴史観とわりとよく似た歴史があったのですが、現代ロシアは日本の東京がまき散らす歴史に連帯しているようです。これを私は非常に切なく思います。昔はあんなにいい歴史観を持っていたのに、なぜ今東京の軍門に下っているのだと。別にそのことで皆さんに反省を迫ろうとは思いませんがね。

ちょっと待ってくださいね。日本に古代はない、必要ないというこの考えを私はいずれ本にするつもりでおります。しかし、おそらく、いや間違いなく、日本の歴史学会は、見て見ぬふりをするでしょう。黙殺されるに違いないという絶大な自信を持っています。なぜかというと、日本には、専門は何ですかと尋ねられると、古代史ですと答える人が山ほどいるからです。今さら古代はないと言えないでしょ

う。あちこちの学会に古代史部会と呼ばれる名前の研究会があります。今さらその名前をやめなさいとは言えないでしょう。ですから、多分日本古代史は続くと思います。いや、私自身、将来書く別の論文では、古代の日本と書いてしまうかもしれません。そのほうが通りもええしね。皆さんにも私の歴史には従わないほうがいいと、そう申し上げます。万が一日本へ行かれたときに、井上のことを尋ねられたら、鼻であしらってやってください。無視してくださって結構です。ただ、無視してくださって結構なのですが、心のどこかに、日本の歴史学会がおしつける歴史の見取り図に全身で歯向かい、京都と関西のために魂を傾けた男がおったんだということをどこかで心にとどめていただければ、これに過ぎることはありませんということで、ほんまはもうちょっと長話しするつもりやったんですが、はしょって、自分の話を終えたいと思います。

どうもありがとうございました。